

赤外線天文学シンポジウム

野口 邦 男*

1. はじめに

京都大学上松天体赤外線観測室の赤外線望遠鏡と申し上げても御存知ない方もおられるかもしれません。この観測室が上松の地で開所式を行なったのは1973年7月7日のことですから、今年は望遠鏡の運転が始まってちょうど3周年ということになります。この機会に今回のシンポジウムは場所も開所式と同じく上松公民館をお借りして8月10日～11日の2日間にわたって行なわれました。50人を越す関連分野の研究者の参加を得て活発なシンポジウムだったと思います。赤外線シンポジウムは今回が3度目で、第1回は1972年2月宇宙航空研究所、第2回は1974年7月名大物理教室で開催されました。

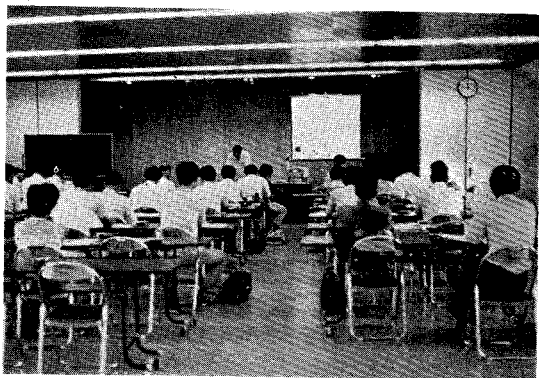
2. シンポジウム

これまでのシンポジウムでは、まだ我々自身の手による観測データが豊富だったとはいえ、シンポジウムを機会にその時点での“現状の問題点”を掘りおこすことが一つの重要なねらいでした。さらに欧米の状況から日本の将来の方向をさぐるという事がもう一つの大きなテーマだったといえます。赤外観測の両輪ともいえる地上観測と上空観測双方について一体となった将来計画が論じられてきました。今回のシンポジウムの特徴は、上松赤外線観測室の3周年を記念する意味も含めて、我々自身が赤外線望遠鏡によって生み出してきたデータを欧米の赤外線天文学の流れの中でとらえながら発表し議論するという点に力点が置かれました。また一方では国内での関連分野の研究者による発表が充実してきた事は心強い限りです。プログラムは次に示しました様に6つの

- § 1. 星の赤外観測及び関連する理論
- § 2. 彗星
- § 3. H II 領域と星の生成
- § 4. 新しい赤外線技術
- § 5. 銀河の構造
- § 6. 将来計画

セッションに分けられ、冒頭にイントロダクションがおかれました。各セッションの詳細は集録に譲ることしましょう。講演数は全部で27（この他にコメントが8）にのぼり話題も非常に広範囲をおおい2日間のスケジュールは興味深い話題でもりだくさんでした。“§6-将来計画”は赤外線望遠鏡の3周年を機として今後の発展の方向をさぐるというねらいで、地上観測の将来計画に重点がしぼられました。世界の大口径望遠鏡の紹介、日本における望遠鏡建設の苦勞話、欧米の状況の話のあと、次期

に期待される大型望遠鏡のモデルをさぐる話まで、今後煮つめていかなければならない問題の一端が提示されました。尚赤外上空観測についても成果が出てきつつあります。今回のシンポジウムでは上空観測の将来計画には触れられませんでしたがこの方面をテーマにした別の機会が期待されます。最後にシンポジウムをふり返って見た時、“現状の問題点がどこにあるか”という視点がやや希薄であったように感じたのは私一人だったでしょう。



3. エキストラ・セッション

3周年を記念して当地でシンポジウムを開催したねらいの一つは関連分野の研究者の方々に赤外線観測の現場を見ていただくことでした。幸い東京天文台木曾観測所の御好意で、赤外線観測室の見学に先立って2kmほど隔てた東京天文台のシュミット望遠鏡の見学が行なわれました。この8月10日夕刻の見学も大変な盛況でした。若い人の間からは、シュミットと赤外両望遠鏡の見学の順序が逆の方がよろしいのではないかとといった忌憚のない意見も聞かれました。大型シュミットのよく整備調整された望遠鏡を見学した後で、ケーブル類が所狭しと張りめぐらされた実験装置まがいの赤外望遠鏡を見学者の方々は、何と感じられたでしょうか……。見学を終えて民宿の広間で催された懇親会では若手世話人が大奮闘でした。50余人による愉快的な喉自慢では赤外シンポ懇親会初演が数多く聞かれました。

このシンポジウムは、宇宙線、長島班、和田班及び天文、成相班から補助を受けて行なわれました。シンポジウムの開催された上松町特に公民館では会場準備等万般にわたってお世話いただきました。東京天文台木曾観測所見学に際しては高瀬・石田両先生に大変お世話になりました。

* 京大理 K. Noguchi